

7月31日（木）に「新宿区立漱石山房記念館」および「文京区立森鷗外記念館」を訪れました。

教室での学びだけではなく、実際に見て、触れて、感じてほしいと願い今回、国語科として「文学館ツアー」を企画しました。夏目漱石、森鷗外という二大文豪の生き様を肌で感じ、生徒たちは大きな感銘を受けたようです。今回参加した生徒たちの感想をお伝えします。

今回、私はツアーに参加することにより、何か新しい刺激を受けられたらいいなと思い、参加しましたが、本当に参加してよかったと思いました。原稿のレプリカを見たり、様々な展示に触れたりすることによって、文豪たちが存在していたという実感と生きた証を感じ取ることができました。また、様々な記録や物などを現代まで残そうとしてくれた人がいるということに心からの賞賛と感動を覚えました。

とても楽しい時間になりました。今回訪れた漱石山房記念館や森鷗外記念館は、実際に漱石や鷗外が暮らしていた場所です。鷗外の観潮楼跡である記念館には、おそらく鷗外が実際に触れていたであろう、「イチヨウの木」や「三人冗語の石」もあり、実在した人間であるということや生の儚さを実感しました。彼らの人生は色濃く、だからこそ言葉に重みがあり後世にも名を残す人物になったのだと思いました。私自身も様々なことに挑戦し、納得できる人生にしたいと思いました。

このツアーに際して漱石や鷗外の著書を読んでから行こうかと考えたが、あえてそうはしなかった。普段本を読み解いて作者を見るが、作者の人生から本を見てもいいかなと思ったからだ。国語の授業とは逆の流れである。実際、ツアーの後に漱石の「こころ」、鷗外の「文づかひ」「舞姫」を読んで、それぞれに彼らの「らしさ」を感じ取ることができたと思う。特に漱石は、「吾輩は猫である」の中で胃弱をネタに文章に盛り込んでいて、ギャグのように楽しむことができた。しかし、後の作品、例えば「門」では、胃痛の描写が細かくあって、その頃の漱石にとって胃痛はもはやギャグとしては扱えないほど他人事ではなくなっていることが分かり、面白く読める。新しい読書の楽しみ方を学べた。

